

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：32649  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2013～2016  
課題番号：25380946  
研究課題名（和文）ロールシャッハ・テスト対象関係発達評価尺度の作成  
  
研究課題名（英文）Rorschach test object representational scale  
  
研究代表者  
大貫 敬一（OHNUKI, KEIICHI）  
  
東京経済大学・経済学部・教授  
  
研究者番号：40146527  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：最初に、対象関係発達評価尺度であるMOAを日本人被検者の反応例を加えて日本版のガイドラインに改良した。  
片口（1960）は日本人は場の雰囲気敏感であると指摘した。この傾向が現代の日本人にも当てはまるかどうかロールシャッハ・テストの反応領域を研究した結果、現代日本人成人においても、分析的・現実的なもの見方ではなく周りの世界を全体として捉える傾向があることがわかった。  
ロールシャッハ・テストにおける人間を表象する反応は、内的な対象関係や情緒を反映する。臨床群の被検者を非患者成人と比較すると、成熟した人間関係を持つ潜在的な能力は有しているものの現実的な人間関係を妨げる要因があることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The first study improves the guideline of Rorschach representation scale ; MOA to develop the Japanese Scoring Guideline using responses of Japanese participants.  
Kataguchi (1960) suggested that Japanese were sensitive to the whole atmosphere of the situation. To establish whether this tendency applicable to current Japanese society, Rorschach location selection was studied. Results suggest current Japanese tend to grasp the stimulus field as a whole rather in an analytic or realistic manner. The human representational responses on the Rorschach test reflect interpersonal perception and inner object relations. Relatedness and affect expressed through the human representational responses of psychiatric patients were investigated compared with non-patients. The results of the study suggest potential capacity for mature relationship, but also showed the factors that disturbed realistic interpersonal relationship.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ロールシャッハ・テスト 人間表象反応 対象関係

## 1. 研究開始当初の背景

出発点となる研究は、科研費の研究課題「ロールシャッハ・テスト成人基準データの作成」である。その研究では、片口法が1950年代の古いデータに基づいており解釈が現代日本人に当てはまらなくなりつつあることから、1990年より新たにデータを収集し300名からなる成人基準データを作成した。この研究で得られたデータがその後の研究の基盤となるデータとなっている。

次の研究課題である「ロールシャッハ・テスト Popular 反応リストの作成」では、作成した成人基準データに基づき Popular 反応（以下、P反応）の研究を行った。結果として、P反応リストが時代的に変化していることを示すと共に、  
、  
、  
図版に出現する人間像P反応は、単独の人間像はほとんど知覚されず「二人の現実的な人間の全身像」が最も多いことを示した（大貫・佐藤・沼，2005）。また、  
、  
、  
図版に人間像P反応が知覚できること、また、それに運動反応が伴うことによって人間像の関係性が示されていることは、基本的に“よい人間関係を結ぶことができる能力”を示していることを指摘した（大貫・佐藤・沼，2005）。

一方、臨床群の被検者を対象とした研究では、上記の非患者成人のP反応研究に基づき、統合失調症患者のP反応の研究を行った。その結果、統合失調症の特徴の1つとされてきたP反応の減少が現代の被検者には見られず、  
、  
、  
図版には、むしろ非患者成人と同様の人間像が知覚されていること、また、それらの反応の多くにM反応が伴っている点も非患者成人と同様であることがわかった。しかし、  
、  
、  
図版以外のカードの人間像反応を分析すると、作話を中心とする逸脱言

語表現が見られ、その部分に思考や知覚の障害が現れていた。また、P反応の基準に達しない特徴的な(P)反応が知覚されていたり、人間を知覚しにくい形態や刺激特性を備えた図版・領域でファンタジーの人間像が知覚されたり、病理を反映する投影がなされていた（沼・大貫・佐藤，2007）。以上のことから、臨床群の対象関係の特徴を明らかにするには、人間像P反応だけでなく、全図版を通した人間表象反応の分析を行う必要があるとの結論に至った。

次に、研究課題「ロールシャッハ・テスト人間表象反応の基礎データの作成」では、これまでの研究に基づき、P反応だけでなく、様々な「人間表象反応」や「対人関係指標」を検討すると共に、自己表象や対象関係を総合的に評価する尺度である「対象関係尺度」（Object Relations Scale）による対象関係の発達評価の研究に着手した。中でも、Urist（1977）が考案し、Holaday & Sparks（2001）が評定尺度化した、Mutuality of Autonomy Scale（以下、MOA）は優れた対象関係尺度と考えられたが、尺度の定義に曖昧さが残り、また、日本人の被検者の反応に基づいていないという問題があった。そこで、それらの問題の解決が必要と考えられ、研究に着手した（大貫・沼・佐藤，2011）。

## 2. 研究の目的

本課題における研究の主要な目的は、ロールシャッハ・テストによる、(1)対象関係の発達段階を評価する新たな尺度を作成し、その尺度を用いて、(2)統合失調症や気分障害、人格障害等の成人、被虐待児童、広汎性発達障害児童・青年などの臨床群被検者の対象関係発達評価の有効性を高めることにある。具

体的には、(1)対象関係尺度 Mutuality of Autonomy Scale (以下、MOA) を改良して日本語版ガイドラインを作成し、さらに(2)人間表象反応指標や認知・情緒の発達理論を組みこむことによって、(3)複数の尺度と指標からなる新たな対象関係発達尺度を作成することである。

### 3. 研究の方法

#### (1)被検者のサンプリング

ロールシャッハ研究は日本人の標準的なロールシャッハ反応データに基づいていることが必要である。本研究が現時点で基づいている非患者成人基準データは、N = 340 名のロールシャッハ・テストデータプールである。臨床群としては、統合失調症群、気分障害群の被検者を対象とした。それらの群からさらにサンプリングをおこなって、非患者成人群、統合失調症群、気分障害群の3群に関して、年齢・性別をマッチングさせた各群 50 例のデータを作成した。

#### (2)人間表象反応指標の検討

ロ・テストにおける人間表象反応 (Human Representation Responses) とは、現実的な人間にせよ非現実的存在にせよ何らかの意味で人間を表象した反応である。Klopfer et al. (1954) は、人間像 (human figures) 反応の内容は自己像と人間関係についての豊かな情報を提供してくれると述べ、片口(1987)も現実の人間の全身像反応Hは「他人に対する関心と感受性を反映」し、また、「他人を受容し共感する能力を示すもの」とし、全反応に対する全人間反応の割合であるH%を対人関係指標として重視している。これらの指標を現実の人間関係を表象する指標として用いる。

#### (3)対象関係尺度(Object Relations Scale)の検討

対象関係とは、現実的な対人関係ではなく、内的な自己表象と対象との関係を示すものと考えられる。対象関係尺度のうち、最も優れた尺度と考えられるのがMOAである。MOAは、精神分析的な対象関係論に基づき、人間運動反応、動物運動反応、無生物運動反応について、対象関係の発達水準を Scale point 1 の独立して相互性のあるレベルから Scale point 7 の破壊的レベルまでの7段階で評定する尺度である。しかし、MOAの評定は困難であることが知られており、Holaday & Sparks (2001) によって作成されたガイドラインにおいても定義の曖昧さが残されているので、さらに改良して日本版の改訂ガイドラインを作成する。

#### (4)認知と情緒の基本的発達評価

対象関係を直接評定するものではないが、ロ・テストに現れる認知や情緒の発達に関する理論も対象関係発達の基盤となる理論である。例えば、ロールシャッハ反応の発達段階、把握型による発達の水準の考え方などがあげられる。これらの考え方の中から、対象関係の発達評価に関係づけられる重要な視点を検討する。

### 4. 研究の成果

#### (1)「MOA日本語版ガイドライン」の作成

代表的な対象関係発達評価尺度である Mutuality of Autonomy Scale(以下、MOA) に、日本人被検者(非患者群及び統合失調症群、気分障害群)の反応例を当てはめてみるといくつかの問題点があることがわかった。

被験者の言語表現の違いに由来する評定の困難、1つの反応に複数の水準が含まれること、水準間の独立性と連続性の問題、水準による反応出現頻度の違い、非患者群及、統合失調症群、気分障害群間での反応の特徴的な違いなどである。そこで、3群の日本人被験者の反応例を用いてMOAの評定を行い、340名の非患者成人の反応を評定し、対象関係の各水準の分布を求めた「MOA非患者成人基礎データ」（未公開資料）を作成した。最終的に、「MOA日本語版ガイドライン」を作成した（大貫・沼・佐藤，2016）。

## (2)日本人のW優位

わが国では、1950年代に日本人のロールシャッハ・テストの基準データが作成されたが、その際、アメリカ人のデータと比較してW優位、つまり、D%と比較してW%が高いことが指摘された（片口，1960）。現代においても、そのような傾向があると言えるか確かめるために、非患者成人データを用いて把握型の特徴を調べた。その結果、W%（cut-off Wを含む）がD%よりも高い被験者が60%を超えていること、カード、、、などのW反応を出しにくい図版でもW%が高いことがわかった。この結果から、現代日本人成人においても、刺激野を分析的・現実的に捉えるよりも全体的に捉える傾向が特徴であることを示していると推測された（Ohnuki, Numa, Satoh, 2014）。

## (3)人間表象反応に基づく情緒と関係性の特徴

人間表象反応に示される関係性と情緒を、非患者成人群及び統合失調症群、気分障害群の反応から比較した。指標としたのは、人間

表象反応のH%と、・・・図版に出現する片口法の間像P反応である。結果として、非患者成人群と比較して臨床群においても、人間表象反応の出現率の高さ、人間像P反応の出現率の高さ、相互的な人間運動反応の出現率の高さが見いだされ、成熟した人間関係を結ぶ能力が潜在的にはあることが示された。しかし、一方では、混交反応、関係の明細化、破壊的衝動がみられ、それらが現実的な人間関係を妨げていると考えられた。これら4つの観点が対象関係の評価に有効であると考えられた（Keiichi Ohnuki, Hatsue Numa, Yoshiko Satoh, 2017）。

## <引用文献>

- Holaday, M & Sparks, .C.L. (2001). Revised guidelines for Urist's Mutuality of Autonomy Scale (MOA). *Assessment*, 8(2), 145-155.
- 片口安史（1960）心理診断法詳説 牧書店
- 片口安史（1987）改訂・新・心理診断法 金子書房
- Klopfer, B., Ainsworth, M.D., Klopfer, W.G., & Holt, R.R. (1954) *Development in the Rorschach technique. Vol.1 Technique and theory.* New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- 大貫敬一・佐藤至子・沼初枝（2005）片口法ロールシャッハ・テストにおける公共反応の再検討 心理臨床学研究, 22(1), 75-85.
- 大貫敬一・沼初枝・佐藤至子（2011）. ロールシャッハ・テスト MOA 相互自律性尺度の検討 - MOA 日本語版ガイドラインの作成 - 日本心理臨床学会第 30 回秋季大会発表論

文集 , p.303.

Urist, J. (1977): The Rorschach test and the assessment of object relations. *Journal of Personality Assessment*, 41, 3-9.

## 5 . 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

大貫 敬一 ロールシャッハ・テストによる対象関係の評価 - MOA 日本語版評定ガイドラインの作成 - 東京経済大学人文自然科学論集 査読無 138 号 2016 35-56.

[学会発表] (計 2 件)

Keiichi Ohnuki, Hatsue Numa, Yoshiko Satoh 2014 Characteristics of Japanese Rorschach location selection. XXI International Congress of Rorschach and Projective Methods. Istanbul.

Keiichi Ohnuki, Hatsue Numa, Yoshiko Satoh 2017 Relatedness and affect based on human representational responses on the Rorschach test. XXII International Congress of Rorschach and Projective Methods. Paris.

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

大貫 敬一 (OHNUKI KEIICHI)  
東京経済大学・経済学部・教授  
研究者番号 40146527

(3)連携研究者

沼 初枝 (NUMA HATSUE)  
立正大学・心理学部・教授

研究者番号 70409564

(3)研究協力者

佐藤 至子 (SATO YOSHIKO)  
仁愛大学・大学院・教授 (2017 年 3 月まで)  
研究者番号 : 10511412